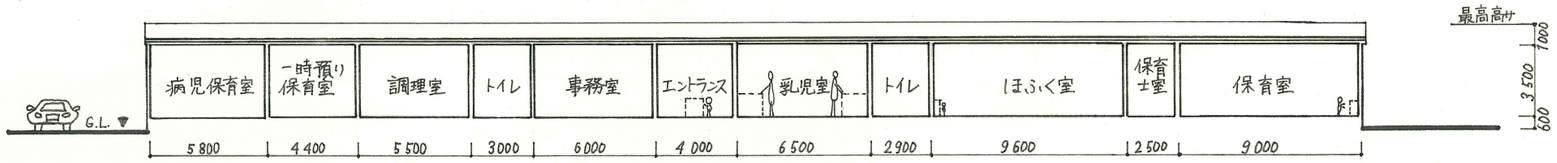
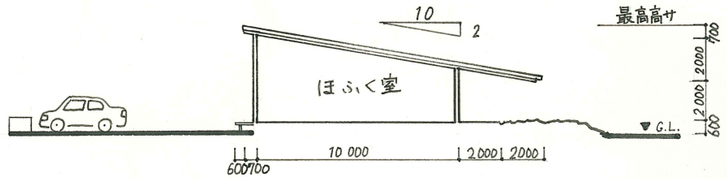
子どもをデザインする保育園～大人への基礎をツクル～

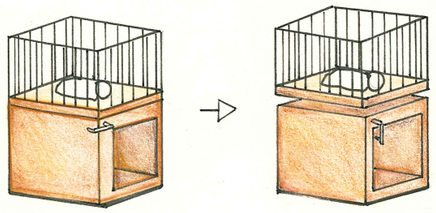


A-A'断面図　S=1:300



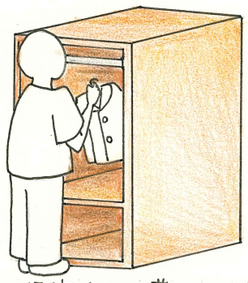
B-B'断面図　S=1:300

～ベッドロッカー～



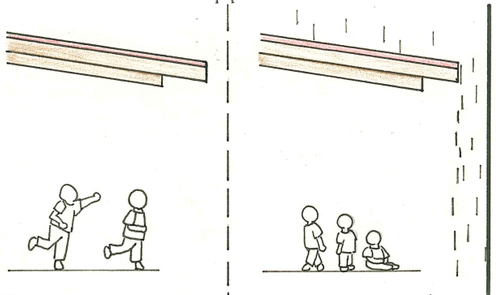
乳児室にはベビーベッドが備えてあり、保育士の体格に合わせた高さに調整できるようになっています。また、ベッドの下の部分は収納として使用することができます。ベッドの配置は保育士が園児全員を見渡せてたくさんの愛情を保護者に変わって全ての園児に注ぐことができるように計画しました。

～ロッカー～



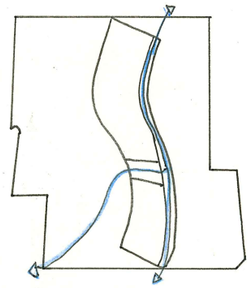
ほふく室と保育室に備えてあるロッカーはハンガーラックが付いていて子供たちが自ら服を脱いでかけたり、着替えをする時に役立ちます。1歳・2歳の時期は園児1人で着替えや飲食ができるようになる時期なので、ロッカーも園児一人一人の自立を考えた設計にしました。

～軒～



園舎から廊下側に広く張り出す軒によって日除けの役割に加えて雨の日でも園児が退屈することなく外で遊ぶことができるように設計しました。また、雨の日は扉がなく開放的な縁側廊下で雨水が軒から滴る音を聞いて楽しむこともできます。

～風の流れ～



園舎の形は豊橋の最多風向である北西の風が心地よく吹き抜けることができ、園児が肌で風を感じることのできるように計画しました。また、縁側廊下に出て外気浴をすることで、皮膚や呼吸器粘膜を鍛錬し、血管運動神経の作用を敏活にし、風邪などを引きにくくすることができると考えました。

～設計趣旨～

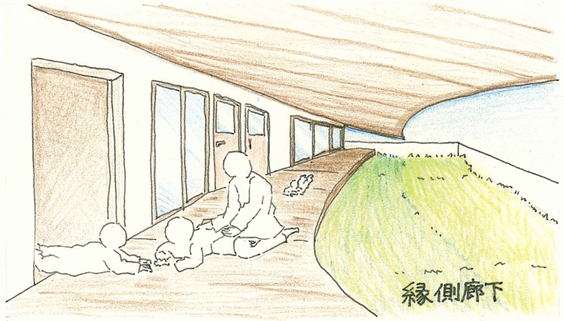
子供の頃は誰しも色んなものに触れ、体全体で感じたものに興味をもつという特徴があります。生後8カ月から歩き始める1歳までの間は、はいはいをして運動能力の基礎をつくり、直接床に触れることで五感を用いて感受性を養っています。ですが最近では、はいはいの期間が短くなり体幹や運動能力が低下しています。その問題を解決するためには、自然やものに五感で直接触れ、保護者等は過保護になりすぎないように子ども自らの成長と自立を促すことが大切であると考えました。それらのことから、私たちは「子ども自身が自ら選択して成長の可能性を広げられ、のびのび"と生活できるような保育園」を提案します。

1003

平面図 S=1:200

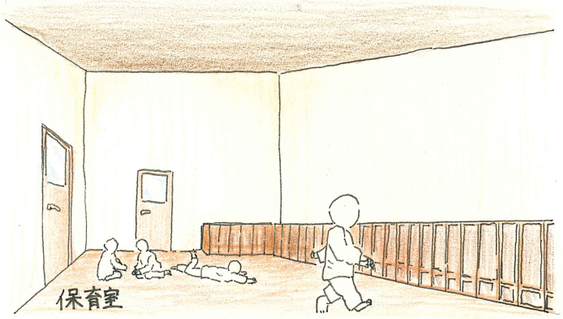
図面説明

敷地南側から北側にかけて広がる園舎には北側に進むにつれて床レベルの異なる乳児室・ほふく室・保育室をそれぞれ設けました。ここでは、子供が大人の階段を登るように年齢によって傾斜に差がある廊下をはいはいや伝い歩き、ひとり歩きで壁や床を伝いながら登ることで運動能力のみならず、五感で豊かな感受性を培うことも想定しています。また、事務室に加えて、保育室と直結する保育士室を設けることで、常に保育士に見てもらえる安心感のもとに子どもたちが過ごすことができます。



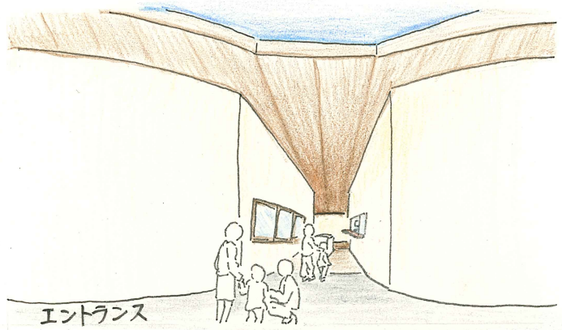
縁側は日本の住まいに古くから設けられてきた場所であり、かつての日本家屋にはほとんど存在したものです。今回の提案では、廊下の連絡通路の要素と縁側の庭を眺めながらくつろげる要素を兼ね備えた、縁側廊下という新しい空間を用います。園児と保護者、保育士が共に季節を感じ、風土と共に育つことができ、保育活動の新しい拠点となるはずです。

0歳児は人生で最も成長が著しい時期だと言われています。園児は毎朝玄関ホールから縁側廊下を通ってはいはいで乳児室に向かいます。1歳児は、はいはいが終わり伝い歩きやつかまり歩きを始める時期です。ほふく室では、壁面に東三河で育ったスギの間伐材を用いて凹凸を作り、園児がそこに掴まって歩くことができるように考えました。



園舎の北東側にある園庭は縁側廊下の傾きと揃えて全体に芝生を張っているため、園児が教室を飛び出して裸足のまま芝生の上を走り回ったりして遊ぶことができます。芝生はフカフカしているので、足の負担になりにくく怪我の心配もないので思いっきり遊ぶことができます。

幅の狭まった入り口を心地よい風の流れとともに、園舎に足を踏み入れると、奥に広がっていくように縁側廊下に続くスロープがあります。ここでは毎日、保護者と保育士があいさつを交わし、子供を見送ります。この場所が保育園で唯一、土足で入ることのできる場所です。



面積表

敷地面積	1,828.65㎡
延べ床面積	666.30㎡
建ぺい率	36.43%

敷地説明

敷地は豊橋市の中心地から少し離れた閑静な住宅街の中にあります。隣地には公園・小学校児童クラブなどがあり、園児がのびのびと過ごすことのできる保育に適した環境です。

使用木材

愛知県において独特の風土や文化を保っている豊橋市の東三河地区では、雄大な自然と温暖な気候に恵まれ、木材は土質が生育に適している事もあり、赤みが強く、色艶がよく、狂いが少なくて病害虫に強いという特徴があります。今回の計画では、東三河で育ったスギやヒノキなどの木材や間伐材などを建物の大部分に使用し、地材地消を推進するとともに、園児たちに五感で木材の香りや手触りなどを感じてもらえるように考えました。